

あ と が き

学生の健康管理からみた本センターのはたすべき役割は、栄養、衛生、精神衛生の各方面にわたります。昨年度の報告書では、それら役割に必要な基本情報源となるべき定期健康診断の受診率の低下をとりあげました。本学全体としては、依然として低下をつづけていますが、幸いにして関係各位の努力により新入学生の受診率が昨年度より向上したのは、大変によろこばしいことであります。入学時からの健康に対する関心が少しでも高いことは、学生その後の人生における安全性を意味すると思いたい。本文中にのべた如く（24～25頁参照）、学生を前成人病集団とみなすとき、間違いなくそう思えます。

前述のような視点から、本年度は学生の血圧に注目してみました。大学生の年令で既にかかなりの頻度で「高い血圧」をみることは、ある種の驚きを与えます（42～46頁参照）。今後の追跡が是非必要と考えます。

一方で、本年度の定期健康診断での異常者中で医療が必要となった者は必ずしも少なくありません。その中で、放置すれば学業の継続のみならず、後の人生に重大な影響を与える疾病も含まれています。その意味では現在の定期健康診断も効果をあげています。しかし、現代医学水準からみて、肝炎などの血液生化学的診断による疾病発見率が「ゼロ」なのは、何んとしても残念でなりません。これら疾病の早期発見、早期治療が叫ばれている時代なのにです。早く血液生化学的検査を定期健康診断にとり入れたいものです。そうすれば「成人病予備軍」に対する、よい生活習慣づけの指導も一層的確になるでしょう。

最後に、本学学生の入学時GHQ（精神健康調査票）の4年分の調査結果が出ました。一般に用いられている判定法基準と比較すると、本学の結果は大変な偏りを示しています。この結果をどのように考えるかは、今後のGHQ調査の実施に大きな影響を与えます。検討を急ぎたいと考えています。

本センターの運営も、少しずつ質的内容の変化が求められつつあります。関係各位の一層の御協力をお願い申し上げます。

（中林 記）